

フェリックス・メンデルスゾーン(1809-47)は、シューベルトによって芸術性を高められた「リート」を継承しつつ、持ち前の品格と自然な旋律を付与した歌曲を作曲した。女声二重唱のための《6つの二重唱曲》は、美しいハーモニーの流れを最大の特長としている。今回、お届けする「挨拶」「秋の歌」「すずらんと花々」では、各々異なる詩人の歌詞の内容に即して、多彩な情景が歌われる。

シューマンと妻クララもまた優れた歌曲を書いた。シューマン(1810-56)がまとめた《愛の春》では、12曲の歌が親密な世界を築く。その第1曲「天は一粒の涙を流した」では、海にこぼれ落ちた涙が貝によって真珠に変わる、という内容が歌われる。クララ・シューマン(1819-96)も20曲以上のリートを残したが、《3つのリート》は、夫ロベルトと共作した《愛の春》に収められたクララの作品。「彼はやってきました」では恋人を想う胸の高まりが、「美しさゆえに愛するのなら」では愛することの根本的な意味が、それぞれ歌われる。

ヨハネス・ブラームス(1833-97)も、持ち前の技法をベースにロマンを漲らせたリートを多数作曲した。クリスマス・イブに完成した「わが恋は緑」は、シューマンの息子フェリックスの詩に付曲したもの。ライラックの緑＝自分の愛が、恋人＝太陽に照らされる喜びを歌う。《4つの二重唱曲》では、四人の詩人の歌詞がバリエーションをもたらしている。「愛の使い」は恋人の間で交わされる春の幸せを、「姉妹」はそっくりな風貌の美人姉妹を、それぞれ歌う。

スペイン人作曲家、マヌエル・デ・ファリャ(1876-1946)の《7つのスペイン民謡》は各地の民謡を素材とした、民俗的な旋律・リズムが印象的なファリャの代表作。「ムーア人の織物」「アストゥリアス地方の歌」における哀愁、「ホタ」の生命感、子守歌の「ナナ」、劇的な「ポロ」と、個性豊かな歌が並ぶ。

イタリア・オペラの大家ガエターノ・ドニゼッティ(1797-1848)の歌劇《ボジリポの夏の夜》は、家族を亡くし、ナポリの劇場がコレラで閉鎖されるなか書かれた歌曲集(「ボジリポ」はナポリ湾を見下ろせる丘の名)。悲嘆に暮れてしかるべき状況であるにもかかわらず、歌詞も音楽も明るく、美しいベルカントで歌われる二重唱はどれもオペラさながらの感興に満ちている。

バレエ音楽で有名なレオ・ドリーブ(1836-91)の歌劇《ラクメ》は、インドを舞台にしたドリーブ最後のオペラ。バラモン教の僧の娘ラクメと召使マリカによる「花の二重唱」は、花咲く川辺の美しさを歌う。

ジョアッキーノ・ロッシーニ(1792-1868)の歌劇《セビリアの理髪師》は、現代でも演奏機会の多いイタリア・オペラの傑作。主人公のロジーナは、窓辺で歌うアルマヴィーヴァ伯爵の歌を聴き、たちまち恋に落ちて「今の歌声は」を歌う。ロッシーニらしい装飾の多い華やかなアリアである。

モーツァルト(1756-91)の作品のうち、最も魅力的なジャンルはオペラだという声も多い。なかでも名作として知られる、ダ・ポンテ台本の歌劇《コジ・ファン・トゥッテ》は、男たちが女性の貞操感を試そうと企むコメディ。二人の男の希望的観測とは裏腹にフィオルディリージとドラベツァの心に変化が生じ、二重唱「私は黒髪の方をえらぶわ」を歌う。歌劇《皇帝ティートの慈悲》はオペラ・セリア(悲劇的題材のオペラ)で、《魔笛》とともにモーツァルトが亡くなる年に書かれた。二重唱「ああ、昔の愛情に免じて」は、ローマ皇帝ティートの友人セストの妹セルヴィリアと、彼女を愛するセストの親友アンニオによる苦悩の歌。

多くの作曲家がゲーテ『ファウスト』の音楽化を試みたが、シャルル・グノー(1818-93)がフランス的な味付けを施した歌劇《ファウスト》はその代表格。第三幕でファウストを思うマルガレーテが、メフィストフェレスの策略で置かれた宝石箱を見つけ、有名なアリア「宝石の歌」を歌う。

エクトル・ベルリオーズ(1803-69)は独創的な作風で知られるが、歌劇《ベアトリスとベネディクト》は、シェイクスピア『空騒ぎ』を原作とした、シチリアが舞台のコメディ。喧嘩ばかりのベアトリスとベネディクトを結びつけようと、エローとユルシュールが二重唱「澄み切った静かな夜よ」を歌う。